

## ユダヤ芸術歴史博物館とパリ・マレ地区

松岡 智子

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2012年10月1日 受理)

### はじめに

マレ地区(図1)はパリの中央部、セーヌ右岸の3区の南半分と4区を占める地域で、観光客の人気スポットとして知られている。ここには最先端の流行のファッションを発信するブティックや雑貨店、個性的なカフェ、レストランやバー、アートギャラリーなどが集まり、さらにはホモ・セクシュアルのコミュニティが形成されており、男性しか訪れないカフェやバーも見られる。

また、この地区にはアンシャン・レジームの名残をとどめる貴族の邸宅が修復・保存され、それらをリニューアルし図書館や美術館・博物館として公開されている。主なものを挙げると、フランス革命時に設立が構想された国立古文書館のほか、ヴィクトル・ユゴー記念館(1903年開館)、フォルネイ図書館(1961年開館)、狩猟自然博物館(1967年開館)、パリ市歴史図書館(1968年開館)、ピカソ美術館(1985年開館)、コニャック・ジェイ美術館(1990年開館)、ヨーロッパ写真美術館(1993年開館)、建築・都市計画資料館(2000年開館、2009年に移転)などがある。本稿で扱うユダヤ芸術歴史博物館もその1つである(図2)。

マレ地区、とりわけロジエ通り界隈は「ユダヤ人街」として知られており、ユダヤ系のパン屋やレストラン、書店が立ち並ぶ。また、パヴェ通りには、アールヌーヴォーの建築家ギマールが手がけ1914年に完成したシナゴグもあり、超正統派と呼ばれる人々の全身黒づくめの服装が目立つ。

本稿では、我が国ではあまり知られていないユダヤ芸術歴史博物館について、その起源やコレクションについて紹介し、マレ地区を中心としたパリのユダヤ人の歴史を概観する。

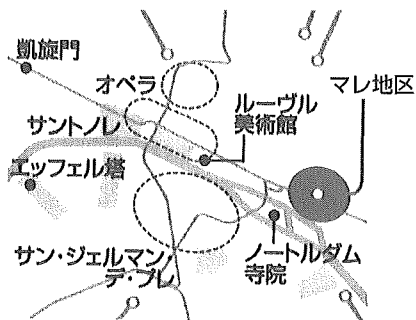


図1 マレ地区の地図



図2 ユダヤ芸術歴史博物館の外観

## 1. ユダヤ芸術歴史博物館

### (1) サン=テニャン館

ユダヤ芸術歴史博物館は、ポブール地区のポンピドゥー・センターにほど近い3区のタンプル通りにひっそりと面している。建築家レンゾ・ピアノとリチャード・ロジャースによる、鉄パイプむき出しの巨大な機械のようなポンピドゥー・センターの攻撃的な外観とは対照的に、サン=テニャン館と呼ばれる石造りの博物館の建築物は中世の面影を宿し、瀟洒で貴婦人のような佇まいを呈している（註1）。

この館は、二人の枢機卿リシュリユとマザランに仕えた外交官ダヴォー伯爵のために、マザランの館の設計で知られる王室建築家ピエール・ル・ミュエ（1591-1669）が手掛けており、中庭と通りに沿った翼をもつ古典主義的な様式により1644年に着工し、1650年に完成した（図3）。その後、サン=テニャン公がこの館を購入し住まいとしたが、18世紀に入ると、新たな住宅地としてフォープール・サン・ジェル

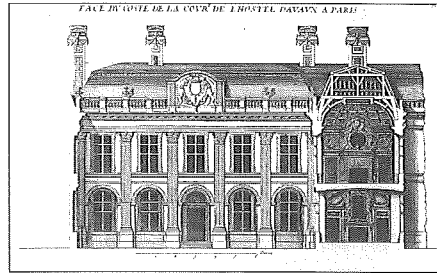


図3 ピエール・ル・ミュエ「ダヴォー館の中庭のファサードの設計図」1647年

マンに人気が集まったため、マレ地区の貴族の邸宅の多くは見捨てられて売却され、工場や学校や低所得層の住宅となった。その後、フランス革命の嵐を免れたサン=テニャン館は1800年から1823年の間、役所として使用され、後に分譲され、上階を増築され装飾も排された。さらにはコンクリートで中2階が作られ、ル・ミュエ当時の優雅な大回廊や階段も失われてしまった。1910年頃に撮影された写真には、第二帝政時代のセーヌ県知事オスマンによるパリの大改造からまぬがれたものの、様々な職人たちが住む共同住宅となり、建物も老朽化し、暖房に石炭を用いたためか壁も黒く汚れて変わり果てたサン=テニャン館の姿が見られる（図4）。



図4 「サン=テニャン館の中庭」（シーベルジェ兄弟撮影）20世紀初頭

荒廃の一途をたどったマレ地区が国家的な保護の対象となったのは、1959年、シャルル・ドゴールによって、アンドレ・マルローが文化を専門的に担当する国務大臣に任命され、1962年に制定された世界的にも前例のない「マルロー法」によって、歴史的な文化遺産やその該当地区の保全を強調したことによる。マレは1964年から1967年にかけて、全体にわたり保全地区に指定され、貴族の館をはじめ周囲の建物の外観の洗浄と磨き直しが行われ、注意深く修復し内部も改築したが、ふさわしくない建物は容赦なく取り壊された（註2）。

サン=テニャン館が博物館として本格的に修復され改築されるのは1980年代からである。1986年、ジャック・ラング文化大臣とジャック・シラク・パリ市長の間で協定を結んだ結果、長きにわたり修復中のサン=テニャン館は、国立古文書館の配下となった。そして、建物の修復及び復元については、主に歴史記念物の主任建築家ベルナール・フォンケルニーが手がけた。改装によってかつてのコーニスや欄干、また、サン=テニャン家の楯形紋飾も蘇った。なかでも見事で目覚ましい復元部分は大階段である。古典建築の専門家クロード・ミニョのアドバイスも加わり、サン=テニャン館をタンプル通りから眺める限りは、17世紀当時の貴族の館の優美さを取り戻したかのようである。

その後、1993年のコンペにより選ばれた建築家カトリーヌ・ビズアールとフランソワ・パンが、博物館を目的とした改築を担当することとなり、1998年、ユダヤ芸術歴史博物館としてようやくオープンしたのである。

本館2階に上がる途中の大階段の横の壁には、大理石の大きな銘板が打ち付けられており、金文字で同年11月30日月曜日の開館式にあたり、ジャック・シラク大統領を筆頭にカトリーヌ・トロットマン文化・コミュニケーション省大臣、ジャン・ティベリ・パリ市長、クロード=ジェラルド・マルクス会長が参加したことが記載されており、この博物館がシラクの指揮の下、国家的プロジェクトとして設立されたことを明示している。

## (2) ストロース・コレクション

フランスにおいて形成されたユダヤ教に関連した初期のコレクションとしては、第2帝政時代、イザック・ストロースが収集したものが挙げられる。

イザック・ストロースはアルザスの同化ユダヤ人であり、1806年にストラスプールの由緒あるラビの家系に生まれた(人類学者クロード・レヴィ=ストロースの曾祖父にあたる)。パリ国立音楽学校のヴァイオリン科に入学し、1854年からオペラ座劇場のオーケストラの指揮者となった。1840年代から祭具の収集を開始し、晩年は家具や典礼のために使用する道具やヘブライ語の写本の調査のために、ヨーロッパ各地を旅し、ユダヤ教に関する最初のコレクションを形成することとなった。1888年、彼の死後、コレクションが売却されると、ナサニエル・ド・ロスチャイルド男爵夫人が購入し、1890年にクリュニー美術館に寄贈された。続いてイザック・ド・カモンド伯爵がトラーを寄贈するなど、クリュニー美術館におけるユダヤ教に関するコレクションはさらに豊かなものになり、独立したユダヤ美術館の設立を切望する声もあったが、反ユダヤ主義とナショナリズムの台頭により第二次世界大戦後を待たなければならなかった(註3)。

## (3) ユダヤ美術館の設立；モンマルトルからマレへ

ホロコーストによって消滅したユダヤ人とユダヤ文化への記憶を残すため、民間団体の尽力により、1948年、パリにようやくユダヤ美術館が設立されることとなった。アメリ

カの「ユダヤ人返還継承組織」(Jewish Restitution Succesor Organization, JRSOと略称)は、ナチスにより略奪されたユダヤ人の文化財を再配分することを委託されて、この組織から1951年に返還された祭具が、初期のコレクションの中核となった。初代館長に就任したレオン・フランキエルは、ヨーロッパや北アフリカの祭具の他に、ヨーロッパのシナゴグに関する文献資料も収集した。そして、最初の学芸員は、ロシア出身のマリー・シャプシャイであり、ロシアやドイツの作家のデッサンや、エコール・ド・パリ、さらには現代作家の作品を収集し、寄贈された作品を受け入れ、美術館の所蔵品を豊かにした。ユダヤ教に関するその他の重要なコレクションとしては、先に述べたクリュニー美術館のイザック・コレクションを挙げることができる。

1970年代以降、以上のコレクションを統合した国立のユダヤ美術館設立のための本格的な運動がシラク市長の支援のもとで行われた。シラク市長は将来の美術館の建物としてサン=テニャン館を提案した。サン=テニャン館に面したタンブル通りはサン・アボワイエ通りに向かって開かれ、サン・アボワイエ通り47番地には、1796年から1822年にかけて、パリの中心的なシナゴグがあった。そして、18世紀末、近くのルナル通り、ジェフロワ=ランジュヴァン通り、モンモランシイ通りには、多くのユダヤ人が住んでいた。さらに、マレ地区のなかでも特に貧しい区域であったロジエ通りとその周辺は、19世紀後半より東欧出身のユダヤ人の移民たちがユダヤ人街を再建した場所でもあった(註4)。

当時のサン=テニャン館は、莫大な費用を投じて改装しなければ美術館として使用できる状態ではなかったが、文化・コミュニケーション省とパリ市双方がそれらの予算を負担することにより、1998年にユダヤ芸術歴史博物館がようやく開館した。文化・コミュニケーション省とパリ市、そして、1988年に設立されたフランスのユダヤ人団体(会長にクロード=ジェラルド・マルクス、副会長はテオ・クラインが就任)によって運営されている。さらに、開館後もユダヤ人の歴史、芸術、文化、民族誌学の領域の資料や、ユダヤ人作家の作品、とりわけフランスに関する所蔵品を収集することに努めている。

また、ポンピドゥー・センター内のパリ国立近代美術館、ルーヴル美術館、オルセー美術館、アフリカ・オセアニア美術館、人類博物館、国立セーヴル陶磁器美術館、カルナバレ博物館をはじめとして、国外の美術館からも寄託作品を受け入れており、コレクションをさらに豊かで多様なものになっている。そして、開館にあたり、フランス国立図書館からヘブライ語の写本、人類博物館からユダヤ人の衣装、また、ニューヨークのユダヤ博物館から19世紀のユダヤ人作家による作品などが特別に貸し出されるという、力の入れようであった。

## 2. ルイ・ミテルベルク作「ドレフェス大尉へのオマージュ」

### (1) ルイ・ミテルベルクについて

ユダヤ芸術歴史博物館の中庭の中央には、作家ルイ・ミテルベルク(通称ティム)が制

作し「ドレフェス大尉へのオマージュ」というタイトルのついた、巨大なブロンズ像が設置されている(図5)。この作品は1985年の作品のレプリカであり、オリジナルの像はパリ6区ラスパール大通りとノートルダム=デ=シャン通りが交差する、ピエール=ラフェと名づけられた小さな広場に佇んでいる(図6)。アルフレッド・ドレフェスは、アルザス生まれのユダヤ人で将来を嘱望されていた陸軍将校だったが、1894年、ドイツのスパイ容疑で逮捕され軍法会議に



図5 ユダヤ芸術歴史博物館の中庭のドレフェス像

より、有罪の判決を宣告され、南アメリカの仏領ギアナ沖の悪魔島への流刑を言い渡された。しかし、提出された証拠は隠ぺい工作であったことが判明したため、エミール・ゾラやアナトール・フランスなどの著名な文学者たちが糾弾し、「ドレフェス事件」は国際的なスキャンダルとなり世界の注目を集めた。破棄院が彼の無罪を言い渡し名誉を回復したのは、1906年のことであった(註5)。

ミテルベルクは1919年、ポーランド東部の小村カルズインで帽子職人の父ナザンと母マルカの長男として生まれ、1937年、18歳の時、建築を学ぶためにヴァルソヴィの理工学校に入学した。しかし、その直後、ドイツ全土に起こった反ユダヤ主義暴動により、翌年、ビザを獲得して単身でパリに渡った。パリでは、建築の勉強のためエコール・デ・ボザールに入学したがほどなく軍隊に入り、マジノ線に到着した。一方、1939年、ポーランドのユダヤ人はゲットーに移住させられ、1943年、ヴァルソヴィ・ゲットーでの火災により父母は亡くなっている。1940年6月、彼はドイツの捕虜収容所に入り、翌年脱走するが、今度はロシアで捕虜となったのち、他のフランス人脱走兵たちとともにイギリスに渡り、同年、ロンドンでドゴールの率いる自由フランスに加わった。1943年、フランスの植民地のみで通用するパスポートを取得、ルイ・ミテル(Louis Mitelle)の名でフランス空軍の伍長となった。1945年、アルジェリアからフランスに帰国途中、空軍警察に捕まり数週間勾留されたのち、釈放され、ようやくパリに戻ったという壮絶な経歴をもつ。



図6 ピエール・ラフェ広場のドレフェス像

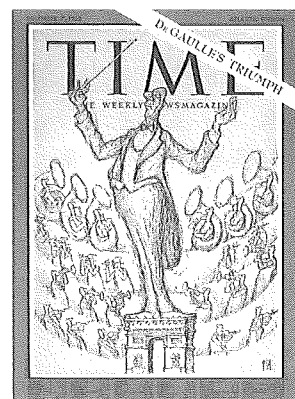


図7 ルイ・ミテルベルク「ドゴールの勝利」(『タイム』1962年7月号の表紙)

1950年、ズッカ・オマレヴと結婚、1959年、挿絵画家として「エクスプレス」社に入り、ティムの名で政治の世界における権力者を痛烈に風刺した。その他、「ル・モンド」、「タイム」、「ニューズウィーク」、「ニューヨーカー」、「ニューヨークタイムズ」などにも彼の政治風刺画が掲載されている(図7)。また、エミール・ゾラ(1970年)やフランツ・カフカ(1963年)の全集の挿絵も手掛けた。そして、1984年、パリの装飾美術館で回顧展が開催されている。

このように風刺画家として名の知られたミテルベルクであったが、彼が彫刻家としても注目されるようになるのは、1985年、フランス政府に依頼され、「ドレフュス大尉へのオマージュ」を制作してからである。以後、風刺画家・彫刻家として作品を発表し続けた。代表的な彫刻作品としては、1992年に設置された、アウシュヴィッツ強制収容所で亡くなった非収容者



図8 ルイ・ミテルベルク「アウシュヴィッツ第三強制収容所モノピッツと特別労働班員」1992年

たちへの記念碑がある(図8)。この作品はアウシュヴィッツ収容所からの生還者の同窓会のメンバーが、後世へのメッセージとしてミテルベルクに記念碑の制作を依頼し、この作品をパール・ラシェーズ墓地に設置するプロジェクトを考案し、文化大臣ジャック・ラングにも支援を求めたもので、1993年2月4日に除幕式が行われた。

風刺画と彫刻の双方の制作を行い、それらに通底する強烈な批判精神とユーモア、また、それらの作風は19世紀のフランス人画家オノレ・ドーミエを思わせ、事実、彼はドーミエを尊敬し、1996年にはオノレ・ドーミエ友の会のメンバーとなっている。1997年まで「エクスプレス」の風刺画を手掛け、2002年1月7日に83歳で死去、同年1月23日、国民議会のための彫刻「ラタポワールを制作するドーミエ」の除幕式が行われた(註6)。

## (2) 蘇るドレフュス像

1980年前後は世界的に反ユダヤ主義が横行し、82年にはマレ地区の有名なレストラン「ゴールデンベルク」で爆破・銃撃により28人が死傷するなど、パリでもテロが続発した。ミッテラン政権下、文化大臣を務めたジャック・ラングは、ミテルベルクにアルフレッド・ドレフュスの像の制作を依頼したのである。彼は彫刻を専門とする作家ではなく、新聞や雑誌の風刺画家として知られていた。しかし、前に述べた彼の経歴と、1967年、エミール・ゾラ全集の挿画を依頼され、そのなかでドレフュス事件を扱っており、ドレフュスやゾラ、ピカール大佐等の主要人物のほか、政治家や陰謀の中心人物の挿画を手掛けたミテルベルクの「実績」が決め手となった。さらに、彼はユダヤ教やホロコースト、今日のイスラエルに関する数多くの挑発的な風刺画も手掛けており、何よりも彼自身の強固な意思による

ものと考えられる。

ドレフュスの記念像を制作するにあたり、ミテルベルクはまず数種類のデッサンを試み、最終的に1895年1月5日、陸軍士官学校の校庭での位階剥奪式の場面を選択する(図9, 10)。憲兵曹長に折られてしまったサーベルの根元部分を顔面すれすれのところに毅然と持つ立像を、陸軍士官学校内に置くことを強く望み、ラングも賛成した。しかし、国防相シャルル・エル

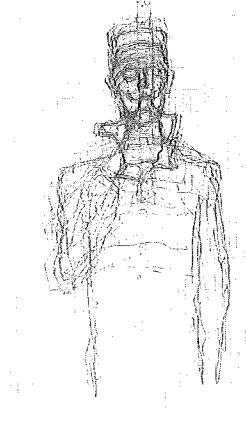


図9 ドレフュス像のためのクロッキー、1985年

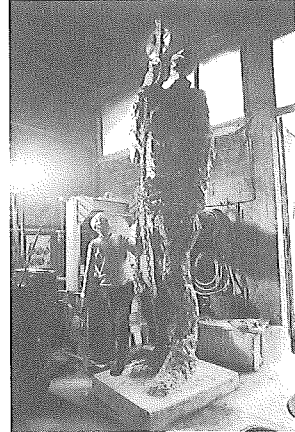


図10 クレマンティのアトリエのドレフュス像とミテルベルク、1986年

ヌは、表向きには一般の見学に不向きとの理由で断った。その後、ヴォルテール広場(現在のレオン・ブルム広場)も候補にのぼるがパリ市が望まなかったため、1988年7月9日、ジャック・ラングは、フィリップ・ガレル作のレオン・ブルム像に近い場所という理由で、国有地であり、ルーヴル美術館に隣接するチュイルリー公園にドレフュス像を設置するための除幕式を行った。

しかし、ミテルベルクはこの場所に納得できず、新たな場所への移動させるために尽力し、ベルフォール市議のジャン・ピエール・シュヴェヌマンは、革命広場かエミール・ゾラ通りに移動することを提案した。ドレフュスの位階剥奪式100周年にあたる1995年の記念行事が目前に迫まっているため、最初の軍法会議で収監されたシュルシュ=ミディ監獄に近い、ピエール=ラフユ広場に移されることに、ようやく決定した。

こうして10年近くもの歳月を経た1994年10月16日、ドレフュス像はチュイルリー公園から移動され、パリ市長ジャック・シラクとミテルベルクが参加し除幕式が行われ、シラクはドレフュス像の前で演説をした。そのなかで、ドレフュス事件が起こった要因として、反ユダヤ主義、人種差別主義、外国人排斥を挙げ、事件から1世紀たった現在のフランスにおいても、伝統主義者や穏健派に属す人々のなかにさえも反ユダヤ主義者が存在し、ユダヤ人の墓が荒されたり、ネオナチも存在すること、そして、ナチスによるユダヤ人虐殺の見直し論もあり、反ユダヤ主義の思想が根絶していないことを警告した(図11)(註7)。

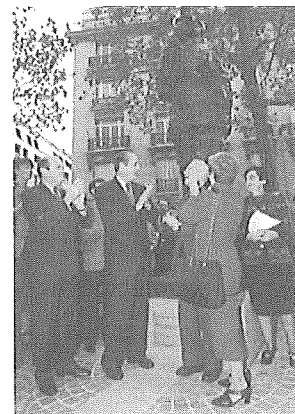


図11 ドレフュス像の前に立つジャック・シラクとルイ・ミテルベルク(右から3番目)

像の台座につけられたキャプションには、「ドレフュス大尉へのオマージュ」というタイトルとともに、「もしあなたが私に生きてほしいと望むのなら、私の名誉を回復してくれ」との言葉も添えられている。高さ4メートル以上ものブロンズ像となって公共の場に立ち現れたドレフュスの姿は、かつてフランス社会に広がった感情の波紋を再び蘇らせた。

この像の芸術的価値について批判する声もあった。ざらざらした肉付けは記念碑としてはふさわしくないとされ、また、作風も、ジャコメッティの模倣あるいはパロディであると批判され、プロポーションに関しても、萎縮した頭の大きさに比べ肩幅が広すぎ、口髭の部分が大きすぎて顔が覆われ、彼の風刺漫画のようにカリカチュアされ過ぎているという声も上がった。そして、1906年に無罪となりレジオン・ドヌール・シュヴァリエ勲章を授与された名誉回復の場面ではなく、あえて屈辱の処罰を受けた日のドレフュスを選択したことや、折れたサーベルを振りかざした姿が、軍の不名誉を強調していると非難された。このようにドレフュス像は、完成するや否や芸術的価値を越えて、「反ユダヤ主義との戦いの象徴」とみなされた。風刺画にも見られる、齒に衣を着せぬミテルベルクの鋭い批判精神は一部の者の怒りを買ひ、ドレフュス像は、しばしば落書きをされている（1995年には「traître（裏切り者）」とスプレーで台座に書かれた）。

### 3. ドレフュス復権100周年を迎えて

2003年3月26日から8月31日まで、ユダヤ芸術歴史博物館で、ショアの記憶保存のための財団とフランス・ユダヤ教財団の支援により、ルイ・ミテルベルクの回顧展が開催され、初期から晩年に至るまでの彼のデッサン、ペン画、彫刻等の作品や資料が展示された。この年、ピエール＝ラフユ広場のドレフュス像のレプリカも、ユダヤ芸術歴史博物館の中庭の中央に作成された。

そして、ドレフュスの無罪が認められ名誉を回復した年から1世紀を経た2006年7月12日、シラク大統領は、位階剥奪式が行われた陸軍士官学校で、ドレフュスの復権100周年を記念する演説を行った。このように国家的に彼を讃える行事を執り行ったのは、大統領ではシラクが初めてである。

ユダヤ芸術歴史博物館は、ドレフュス一家とドレフュス事件に関する資料を収集しており、2006年、3075点の目録が作成された（手稿、書簡、電報、写真、家族の思い出の品、公文書、書籍、絵葉書、ポスターなど）。その他、博物館の図書室には、主に1894年から1935年にかけて刊行された、ドレフュス事件について直接・間接的に言及した出版物が300点以上ある。そして、2006年6月13日、ユダヤ芸術歴史博物館では、「アルフレッド・ドレフュス、正義への戦い」と題する展覧会が開催された。

ドレフュスの名誉回復100周年を記念し、2006年から2007年にかけて、様々な行事が開催された。主なものを以下に挙げる。2006年1月23-25日、「ドレフュス事件、20世



紀の誕生」をテーマとしたシンポジウムがユダヤ芸術歴史博物館で開催された。その後、3月23-25日、レンヌのブルターニュ博物館では、「1906-2006、ドレフュス事件に関する新たな視点」をテーマにシンポジウムを開催、同博物館では3月28-31日にかけて「光のなかのドレフュス事件」をテーマとする展覧会が開催された。また、5月9日、フランスの最高裁判所の大法廷で、「破棄院によるドレフュス大尉の復権」をテーマとしたシンポジウムが開催された。2006年6月、ドレフュスへのオマージュとしての記念切手が発行され、6月19日、大法廷で、「ドレフュス事件のなかの正義」についてのシンポジウムが行われる。6月28日、フランス国立図書館（フランソワ・ミッテラン図書館）で、「ドレフュス事件の一次資料」についてのシンポジウムが開催される。7月6日、CRIF（フランス・イスラリットの代表会議）とパリ市により企画されたシンポジウムが、パリ市庁で開催される。7月7日から11月25日まで、オーリヤック市の芸術・考古博物館で、「明らかにされたドレフュス事件、出来事のなかの写真と写真術」が開催された。7月10日、イッシー＝レ＝ムリノー市で「アルフレッド・ドレフュス広場」の開幕式が行われる。7月12日、モントルイユ市により「アルフレッド・ドレフュス通り」の開幕式が行なわれる。9月27-12月10日、ナンシー市のナンシー派美術館で「エミール・ガレとドレフュス事件」と題する展覧会が開催される。10月1日、メダン市のエミール・ゾラの家で、「出会い」と称し、ドレフュスの孫、シャルルや歴史家・作家のヴァンサン・デュクレールらが講演を行う。2007年3月12日まで、ミュルーズ市の歴史博物館で「明かされたドレフュス事件」と題する展覧会が開催される。

#### 4. まとめ

本年2012年はヴェルディヴ事件から70年目にあたる。この事件は1942年7月16、17日の早朝、ナチス占領下のパリとその郊外に住む1万3152人のユダヤ人がヴィシー政府の警察の一斉検挙によって逮捕され、水も食料も与えられずに4115人の子供、2916人の女性、1129人の男性が冬季自転車競技場（ヴェルディヴ）に5日間、拘禁された事件のことである。そして、その後、4051人の子供たちが親と引き離され、列車でアウシュヴィッツに送られ虐殺された。しかし、長い間、この事実を明らかにすることはフランスではタブーとされており、1980年代に行われた一連の「人道に対する罪」裁判によって、広く知られるようになってきたが、フランス政府が公式に認めるには、半世紀近くも待たなければならなかった（註8）。

1995年7月16日、シラク大統領は第二次世界大戦中、フランスに在住したユダヤ人に対し行われた犯罪に対して、ヴィシー政権が加担したことを認め謝罪するという、歴史的な演説を行った（註9）。そして、1997年、ユダヤ人からの財産略奪を調査し、被害者への賠償を提示するため、ジュベ首相はマテオリ調査委員会を設立し、2000年5月に報告書を提出した。また、委員会にはショアの歴史の記憶とその

教訓を普及のものとする義務があることを強調し、2000年、ショアの記憶保存のための財団が設立され、初代理事長にシモーヌ・ヴェーユが就任した。そして、2005年、マレ地区にショア記念館が開設され、開館式でシラクは、ここでもまた、反ユダヤ主義と戦うことを宣言している（註10）。

サン=テニャン館もヴェルディヴ事件と深く結びついていた。展示室を出た階段の踊り場からガラス越しに見えるのは、博物館が開館した年にクリスチャン・ボルタンスキーが寄贈したインスタレーションである（図12）（註11）。それは吹き抜けの壁に、1939年の時点でこの館で生活していた80人近くの住人ひとりひとりの名前、職業、出身地を記した長方形のカードが貼り付けられたものであり、ヴェルディヴ事件の際、そのなかの13人のユダヤ人が強制連行され、収容所で亡くなった。

そして、サン=テニャン館の修復とともに庭の造園作業も進められ、2007年6月20日、4000㎡の庭が公開され、「アンネ・フランクの庭」と名付けられている。パリ市長のベルトラン・デラノエやパリ3区のピエール・アイデンバウム区長、駐仏オランダ・イスラエル大使、さらに、アムステルダムにある「アンネ・フランクの家」館長のハンス・ウェストラ氏らがセレモニーに参加し、「アンネ・フランクの家」にあるマロニエの木の枝を移植した。庭の一部を果樹園のようにしつらえ、生命力の強い植物や、訪れる人々を受け入れる芝生も植えられた。

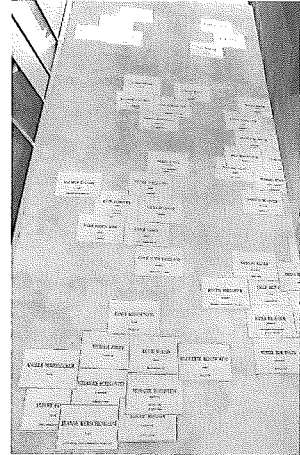


図12 クリスチャン・ボルタンスキー「1939年のサン=テニャン館の住人」、1998年

## 註

- (1) サン=テニャン館及びユダヤ芸術歴史博物館については、以下の文献を参照。F. De Saulcy, *Histoire de L'Art Judaique*, BiblioLife, LLC, 1858. *Guide des collections*, Musée d'art et d'histoire du Judaïsme, 2003. Dominique Jarrassé, *Guide du patrimoine juif parisien*, Parigramme, 2003.
- (2) マレ地区の都市計画や歴史については、以下の文献を参照。アレックス・カーメル著、中川美和子訳『マレの街かどーパリ歴史散歩』白水社、2000年。和田幸信「マルローが救ったマレ地区」(『美観都市パリー18の景観を読み解く』) 鹿島出版会、2010年、145-166頁。ベルナル・マルシャン著、羽貝正美訳『パリの肖像 19-20世紀』日本経済評論社、2010年。荒又美陽『パリ神話と都市景観ーマレ保全地区における浄化と排除の論理』明石書店、2011年。
- (3) フランス近現代史におけるユダヤ人については、以下の文献を参照。柴田三千雄・樺山絃一・福井憲彦編『世界歴史体系 フランス史3ー19世紀なかばー現在ー』山川出版社、1995年。渡邊啓貴『フランス現代史』中央公論新社、1998年。渡辺和行『ホロコーストのフランス』人文書院、1998年。ロバート・O・バクストン著、渡辺和行・剣持久木訳『ヴィシー時代のフランス』柏書房、2004年。エリック・ルーセル著、山口俊章・山口俊洋訳『ドゴール』(ガリマール新評伝シリーズ世界の傑物7) 祥伝社、2010年。ロジャー・ブライス著、河野肇『フランスの歴史』(ケンブリッジ版各国史) 創土社、2008年。武

井彩佳『ユダヤ人財産はだれのものかーホロコーストからパレスチナ問題へ』白水社、2008年。Lynn H. Nicholas, *Le Pillage de l'Europe*, Éditions du Seuil, 1995.

Á *Qui appartenait ces tableaux?* Musée d'Israël, Musée d'art et d'histoire du Judaïsme, Éditions de la Réunion des musées nationaux, 2008.

- (4) マレ地区のユダヤ人については、以下の文献を参照。Michel Winock, *La France et les Juifs*, Éditions du Seuil, 2004. Sous la direction de Jean-Pierre Azéma, *Vivre et survivre dans le Marais*, Éditions Le Manuscrit, 2005. Sous la direction de Paul Salmona, Laurence Sigal, *L'archéologie du judaïsme*, La Découverte, 2011. 有田英也『ふたつのナショナリズムーユダヤ系フランス人の「近代」』みすず書房、2000年。
- (5) ドレフュス事件については、以下の文献を参照。ピエール・ミケル著、渡辺一民訳『ドレーフュス事件』白水社、1990年。平野新介『ドレフュス家の一世紀』朝日新聞社、1997年。菅野賢治『百年目のドレフュス論争』（一橋大学機関リポジトリ HERMES-IR）91-97頁、1997年。稲葉三千男『ドレフュス事件とエミール・ゾラ』告発社、1999年。
- (6) ルイ・ミテルベルクについては、以下の文献を参照。*Tim: Être de son temps*, Musée d'art et d'histoire du Judaïsme, Édition Herscher, 2003.
- (7) Idem, p.139.
- (8) ヴェルディヴ事件に関する映画や小説で、我が国に紹介されたものとしては以下参照。タチアナ・ドロネ著、高見浩訳『サラの鍵』新潮社、2010年。この小説は同年、ジル・バケ＝プレネール監督により映画化され、第23回東京国際映画祭最優秀監督賞と観客賞を受賞した。また、同年、ローズ・ボッシュ監督による『黄色い星の子供たち』も全国ロードショーで上映され反響を呼んだ。
- (9) ジャック・シラクについては、以下の文献を参照。軍司泰史『シラクのフランス』岩波書店、2003年。Pierre Péan, *L'inconnu de l'Élysée*, Fayard, 2007. Jacques Chirac, *Mémoires 1*, NiL éditions, 2009. Jacques Chirac, *Mémoires 2*, NiL éditions, 2011. また、他の美術館構想については、以下の文献を参照。Sally Price, *Paris Primitive: Jacques Chirac's Museum on the Quai Branly*, The University of Chicago Press, 2007. Agnès Bernard *Musées et portraits présidentiels*, L'Harmattan, 2009. Stephane Martin, *Musée du quai Branly là où dialoguent les cultures*, Gallimard, 2011. Eves Marek, Claude Mollard, *Malraux, Lang...et après?*, Area, 2012. 松岡智子「ジャック・シラクの美術館構想に関する一考察」（『倉敷芸術科学大学紀要』第16号）、2011年、25-36頁。松岡智子「シラク政権下におけるもう一つの美術館構想ー国立移民史博物館をめぐる」（『倉敷芸術科学大学紀要』第17号）、2012年、37-48頁。
- (10) シモーヌ・ヴェーユ著、石田久仁子訳『シモーヌ・ヴェーユ回顧録』パド・ウィメンズ・オフィス、2011年。
- (11) クリスチャン・ボルタンスキーについては、以下の文献を参照。湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキーー死者のモニュメント』水声社、2004年。クリスチャン・ボルタンスキー、カトリーヌ・グルニエ著、佐藤京子訳『クリスチャン・ボルタンスキーの可能な人生』水声社、2010年。Catherine Grenier, *Christian Boltanski*, Flammarion, 2011.

## The Musée d'art et d'histoire du Judaïsme and the Marais quarter in Paris

Tomoko MATSUOKA

*Collage of the Arts,*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received October 1, 2012)

The Musée d'art et d'histoire du Judaïsme, located in the mid-17th-century Hôtel de Saint-Aignan in the Marais quarter in Paris, opened in 1998 to present the history of Jewish art, culture and religion in France and Europe.

This paper gives an overview of the history of the Musée d'art et d'histoire du Judaïsme from its origin to today, and makes clear that the monument of Alfred Dreyfus and the installation of Christian Boltanski were fixed in advance to make this museum a memorial to Antisemitism and the Holocaust in France.